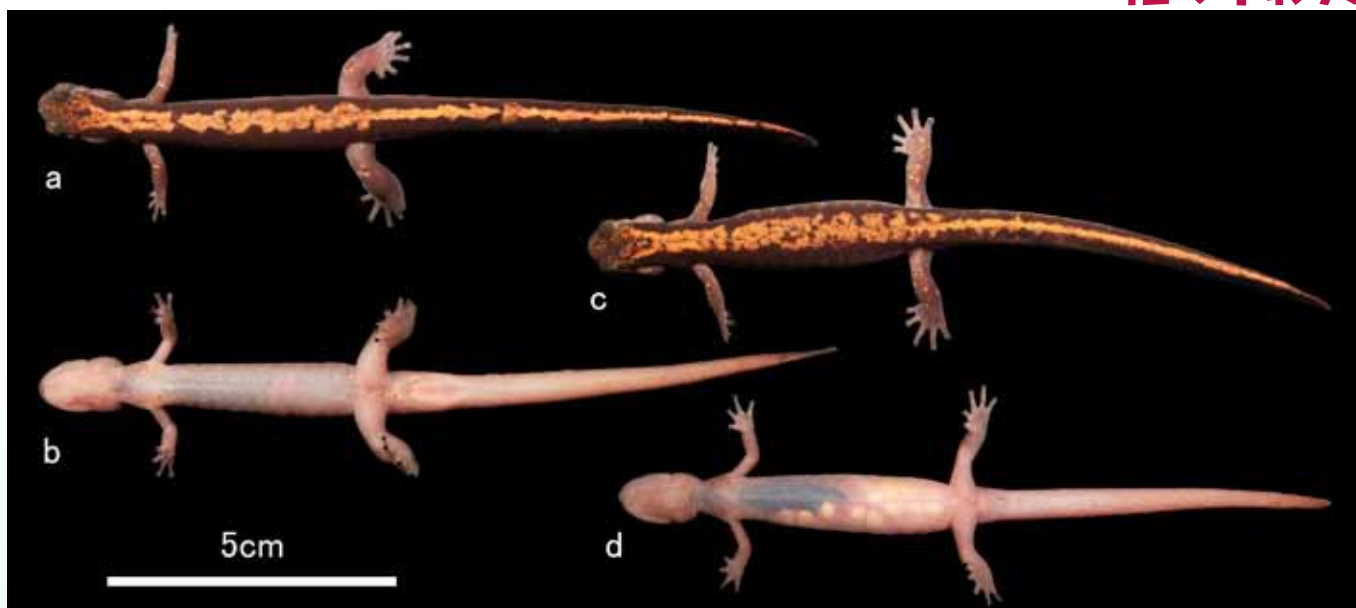


ハコネサンショウウオ

佐々木彰央



伊豆半島のハコネサンショウウオ成体 aオス背面 bオス腹面 cメス背面 dメス腹面

ハコネサンショウウオは両生綱サンショウウオ科に属する日本固有の小型サンショウウオです。本種は1782年に箱根産の標本に基づきHouttuynによって記載され、長らく本種のみが国内に広く分布するものと考えられてきました。国外においても、1886年にBoulengerによって記載されたハコネサンショウウオモドキがロシア、中国等に広域分布するものと考えられてきました。しかし、近年の遺伝的、形態的な研究に基づき2012年から2014年の間に次々と新種が発表され、キタオウシュウサンショウウオ、ツクバハコネサンショウウオ、シコクハコネサンショウウオ、バンダイハコネサンショウウオ、タダミハコネサンショウウオの5種が加えられました。さらに、国外においても中国と朝鮮半島から2012年に新種として3種が加えられ、本属はわずか2年で2種から10種へと増加しました。

その内、静岡県にはハコネサンショウウオ1種のみが分布し、伊豆半島、愛鷹山、南アルプス地域などの渓流域周辺から確認されています。本種成体には肺がなく、皮膚呼吸に依存することから、冷涼で湿潤な環境の石下や倒木下に身を潜めています。繁殖期になると伏流水中へと潜り水中の岩下や滝壺などに卵嚢を産み付けることが知られています。繁殖個体の指先には、その期間だけ黒い爪が生えており、水中の岩に引っ掛けて移動します。幼生にも爪があり水中の石や落葉下に隠れ、日が暮れると餌となる水生昆虫等を求めて出てきます。陸上へと移行する「変態」までの期間は長く、約2年以上を要することから、生息地の渓流を探すといつでも幼生が見つかります。一方、成体は見つけることが難しく、石や倒木下を丹念に探す必要があります。1日探しても1~2頭見つければ良い方です。

2017年5月、私は協力者3名と共に「両生類に吸着するヒル類」を探る目的で、伊豆半島へ調査に出かけ、本種の生息する沢の石をどかして幼生を探しました。すると、予想に反して水中から現れたのは成体で、1時間足らずでオス2個体、メス4個体の計6個体を確認しました。いずれの個体も黒い爪が生えており、オスの後足は肥大し、メスのお腹は卵が透けて見えていました。さらに、翌日の夜間、協力者1名と共に愛鷹山で調査を実施したところ、伏流水が多く湧きだす岩の上を徘徊するオス成体4個体を確認することができました。残念ながら観察した全ての個体からヒル類を確認することができませんでした。静岡県内に生息するハコネサンショウウオの繁殖時期と場所を記録できたことは大きな成果でした。今後は繁殖を終えた個体の体表面を観察し、ヒル類が吸着していないかどうかを調査する予定です。

今回調査協力を頂いた高田歩氏、山本幸介氏、江林奏絵氏には厚くお礼申し上げます。また、本調査は藤原ナチュラルヒストリー振興財団からの助成を受けて実施致しました。今回の詳細な記録については静岡県RDBに報告する予定です。